

2025年 5月15日

金沢大学産学連携協力会 御中

## 第9回 若手研究者奨励賞 研究経過レポート

所 属 金沢大学資料館

職 名 特任助教

ふりがな まつなが あつし

氏 名 松永 篤知

## 1. 研究の概要

### (1) 採択研究テーマ名

石川县域を中心とする先史編織技術の現代繊維製品への応用

### (2) 採択された研究の目的及び要旨

編織物は、先史時代以来、人類にとって重要な生活道具である。広義の編物にはカゴなども含まれ、化学製品が登場・普及するよりも前の時代においては、衣食住その他、生活のあらゆる分野に編織物が用いられていた。

本研究の目的は、石川县域を中心とする北陸地域の先史時代（主に縄文時代・弥生時代）の編織物および編織具を考古学的に分析し、その技術を現代繊維製品に応用することで、これまでにない編織物を生み出すことを目指す。具体的には、石川县域および周辺の先史時代遺跡から出土した編織物・編織具を集成した上で、各資料を詳細に観察・記録し、それらの特徴を他地域の編織物・編織具と比較しながら明らかにする。そして、石川县域及び周辺の先史編織物・先史編織具の構造等がどのようなものであったのか、製作実験・使用実験等を通じて復元し、それを現代の繊維製品に応用するのである。

本研究によって化学製品が出現する前の編織物を改めて評価することで、自然環境にも優しいサステイナブルな新製品が誕生することが期待される。また、かつて石川県に根付いていた編織工芸の復興や石川県内の地域振興にもつながる可能性を有しており、産学連携の好例となり得る。

## 2. 研究の遂行

### (1) 研究経過・成果

本研究の当初計画では、(1) データ集成・整理、(2) 考古学的分析、(3) 現代繊維製品への応用という3段階を予定していた。しかし、受賞の翌月の2024年1月1日に発災した令和6年能登半島地震の影響により、申請者自身を含む県内の考古学・埋蔵文化財関係者が被災文化財のレスキュー活動を優先せざるを得ない状況となってしまった。そのため、2024年4月末頃までは金沢にて可能な範囲で(1)のデータ集成・整理を進めることになった。申請者が元々持っていた先史編物のデータに、最新の情報を追加することで、次の段階に向けての下準備を整えた。

それから5月に入り、羽咋市歴史民俗資料館が再開したことを受けて、5月15日に同館が所蔵する考古資料・民具資料（考古資料の比較資料）の編織物・編織具の資料調査を実施した。同館は、石川県の有名な弥生時代遺跡である吉崎・次場遺跡（国指定史跡）から出土した考古資料や、菅池の箕（羽咋市指定無形文化財）をはじめとする民具資料が充実しているため、第一の調査地として選択した。そして、考古資料では被籠土器や横槌などを、民具資料では箕・俵・俵編み機・嬰兒籠などを、詳細に観察・記録した。各種資料に対して三次元計測も実施し、石川县域・北陸地域の編織物・編織具の代

表例として、(2)の考古学的分析を進めた。それから、羽咋市調査で得た知見も含め、5月26日に千葉大学で開催された日本考古学協会第90回総会で、弥生時代以降の稲ワラ製編物について口頭発表を行った。

以降、随時最新の情報を追加しながら、県内外各所の考古資料・民具資料の編織物・編織具を観察・記録し続け、(1)・(2)を充実させていった。その結果、特に石川県の先史編織物・先史編織具についての知見が深まり、最終的には1本の学術論文として結実した。具体的には、当該年度末の2025年3月2日に刊行された『学究無限』という論文集に、「石川県域における「編む」から「織る」への編織技術革新」というタイトルの単著論文が掲載された。この論文では、東アジア先史時代の編織技術革新を巨視的に踏まえた上で、石川県域における縄文時代から弥生時代にかけての編織物・編織具の変遷を追った。それにより、縄文時代前期以来の編物が、地域性も持ちながら籃胎漆器への進歩も見せつつ縄文時代晩期まで続き、縄文時代晩期末から弥生時代前期にかけて変化を見せ始め、さらに弥生時代中期までに技術革新が進んで布が織物に移行したという編織技術革新の過程を明らかにすることができた。さらに重要なこととして強調したいのが、『学究無限』は、石川県の考古学界の最重鎮である吉岡康暢氏（国立歴史民俗博物館名誉教授）の卒寿記念誌であるという点である。この論文集に申請者の論文が掲載された学術的意義やインパクトはきわめて大きい。事実、この論文集は刊行からわずか2か月後の5月7日時点で見事に完売となっており、全国の考古学研究者が手に取って目に触れるものとなっている。

## (2) 今後の研究進展及び方向性

研究のスタート時点から予期せぬ能登半島地震の影響を受けてしまったが、それでもこの1年間で、3段階の当初計画のうち、(1)データ集成・整理、(2)考古学的分析の2段階まではかなり進めることができた。今後は、本来の最終段階である(3)現代繊維製品への応用につなげることを目指す。

具体的には、考古学的分析によって明らかになった石川県域及び周辺の先史編織物・先史編織具の特徴を、コースター、マスク、衣服、履物、バッグ、敷物、カゴなどの繊維製品に応用する方法を探っていく。先史時代の編織物・編織具は、どの地域においても全て自然素材で出来ており、製作技術的にはいずれも人間の手による。それが、石川県域の縄文時代・弥生時代でも同様であることを、2024年度の1年間で詳細に確認することができた。残念ながら、その知見を実際どのように現代繊維製品に組み込んでいくかを検討するところまではたどり着けなかったため、2025年度以降はそこに重点を置いた研究活動を続けていきたい。現代繊維製品への応用方法を考える際には、製作実験や使用実験を繰り返しながら、先史時代の要素を組み込みつつも現代人にとって使い勝手の良いものを目標としたい。

そして、明確な製品案が固まったところで、金沢大学産学連携協力会の会員企業様と相談しながら、新製品の開発ができれば、当初想定した通りの産学連携の好例となるだろう。なお、現時点でも想定されるのは、自然環境に優しいサステイナブルな製品であり、それらをうまく活用することができれば、石川県域における繊維分野、工業分野、観光分野への波及効果も大いに期待できる。そして、石川県内各市町の伝統工芸ともリンクした地域産業の創出および振興や、石川県内の遺跡巡りをはじめとする文化観光の推進に発展する可能性も高い。

今後の研究進展と方向性については、上記のような計画を考えている。なお、今のところ考古資料としては確認されていないが、『延喜式』（927年）によれば古代の能登国は席（むしろ）・薦（こも）の産地として知られており、場合によっては能登半島地震の被災地の復興支援につながる可能性もある。

### 3. 発表論文一覧等

#### 論文

- ・「石川県域における「編む」から「織る」への編織技術革新」、松永 篤知、『学究無限 吉岡康暢先生卒寿記念論集』、査読無、71頁-80頁 2025年3月2日

#### 口頭発表

- ・「弥生時代以降の稲ワラ製編物について考えるー考古・民俗・民族を中心にー」、松永 篤知、日本考古学協会第90回総会（会場：千葉大学）、2024年5月26日